南浦文之墓

【所　在　地】姶良市加治木町反土 1814
【種　　別】国指定史跡
【指定年月日】昭和 11 年９月３日

九州自動車道の加治木インターの北側，山の麓にひときわ大きい瓦屋根の建物がある。安国寺である。南浦文之の墓は，本堂の左手のこんもりとした樹々に囲まれた歴代住職の墓の一角にある。

文之は，弘治元（1555）年日向国飫肥南郷の外浦（現在の宮崎県串間市）に生まれ，13 歳のとき串間の竜源寺に入り，一翁に師事して禅（臨済宗）と儒学を修めた。のち，島津義久・義弘・家久の３代に仕え，安国寺（現在の加治木町）・正興寺（現在の隼人町）の住職となり，さらに鹿児島城下，もと内城の地に家久が大竜寺を建てたとき，その開山となった。また，遠く鎌倉の建長寺，筑前国（福岡県）の禅光寺の住職にもなっている。

臨済宗の僧呂ではあったが，朱子学にも秀で，『南浦文集』，『四書集註』，『周易談義』など漢籍の訓点を施し，後世まで「文之点」としてその権威を保ち，日本儒学の発展に貢献している。

文之の門流からは，泊 如竹，平田純正らの儒学者が輩出し，また，成立当初の鹿児島藩の財政，外交上の相談役としてその深い学識を活用した。

なお，17 世紀初め，約 60 年前の鉄砲伝来のときの模様を，史料や伝承によって記述し『鉄炮記』を著したことも忘れてはならない。